



途端 担当の所長が私のそばに「とやがてきて、なんと言いたと思いますよ。」と内密に「だつて(笑)」

安久工機に大手企業から仕事
が次々と舞い込むのは、この会社が
ほとんどボランティアで理工系学
生の卒業製作をサポートしている
からだ。メーカーに入社した彼らが
やがて難題を手に戻ってくる。

「今の大手企業は、利益を自社に

還元させることしか考えない。うち
はいつも利益の環流を考えている
んです。」

人工心臓、細胞培養ユニット、ゴミ
の可溶化装置ほか、数え切れない
開発を手がけてきた田中社長の言
葉には、誇りと危機感がにじむ。

「最先端の加工機械はインマントさ
れていないものは決して作れない。
新しいものを生み出すのは、いつ

だつて基礎技術なんですよ。」

仕事というのには、『自分の手形を
残すこと』だと思つて。最先端といふ
つまりは他人が作った匿名の技術
を利用するだけなら、自分がやる
意味などない。工場に所狭しと並
ぶ数百のネジ、ドリルの刃、旋盤、
コトド類、油だらけの布、工具の数々

は、『技術するのは手仕事なんだよ』
と語っているように見えた。



田中 文夫

昭和5年、宮崎県都城市生まれ。中学3年時、報国隊で戦闘機「飛燕」に携わったのがものづくりの出口。終戦後、炭坑労働など数々の仕事を経て、大手電機メーカーの試作を手伝い始め、人工心臓、原子力発電所の機械制御方式など画期的なメカの開発に参加。苦学して明治学院商学部卒。技術はすべて独学である。昭和44年に安久工機を設立。長男の隆氏(写真右)は同社専務。

P
R
O
V
I
S
I
O
N

職人の技

シリーズ

町工場の総合エンジニア

ふと考えた。技術とは、なにも個人だけに蓄積されるのではない。国や、地域や、企業に蓄えられ、継承される技術もある。中でも、日本の工業技術の支柱」と言われる町工場の現実を確かめたくて、東京都大田区、小さな工場のひしめく町へと出かけた。

個性的な会社に事欠かない町工場の中から安久工機を選んだのは、この会社が現代における町工場のスタンスを鮮やかに示しているからだ。

「医療と同じように、メカの技術も枝葉へ行きすぎてしまうと、アナログな基礎技術のわかる技術者は大企業にいななくなってしまう。だから試作だとか、面倒な問題が持ち上がると、有名企業がウチみたいなところに相談に来る」

安久工機は、世界でも類を見ない技術集積工リア・大田区の「技術コネクター」を自認する会社。

田中社長曰く、「どんなものだって加工できる」昔ながらの汎用旋盤など、高い自社技術を持つ一方で、独自の加工技術を持つ地元企業50社以上と協力し、あらゆる無理難題に答えを出してきた。たとえばどんな？ 社長は、もう時効かな」と、大手電機メーカー（仮にA社）としておこうの話をしてくれた

「原子力発電所の、A社の手がけた部品に不具合が発生した。それが外から見えないダクトの奥での故障。その箇所を確認するために、ラムダムに動ける巨大な胃カメラみたいなものを作れないかって言うてきたんですよ」

当初A社は社内で開発しようとしたが断念。緊急事態に、安久工機の小さな応接にA社の部課長から担当者までがズラリと揃い頭を下げた。つづ。

「話を聞いていた専務、私の長男が坊さんの数珠はどつかないよ」ってつぶやいてね。早速、玉がつかない

形状のものを試作してみたけれど、動きをうまくデジタル制御できないさってさうしよう」

アイディアを出し合いつつ、田中社長が、蛇腹型に加工したテフロンのチューブの中にガラスファイバーを通しては」と発案。すぐに特殊技術を持つテフロ工場に加工を依頼し、その他の部品も旧知の工場に次々と発注。急ぎ試作品を組み上げた。

「A社の社員に『あんたら依頼して終わりだと思ったら困るんだ』ってハッパをかけて、近くの多摩川べりまで30mもあるチューブを一緒に担いで行ってテストしましたよ」

リミット前日、滑り込むように納品スタッフの歡喜。しかしこの話にはオチがある。

「完成祝いの酒席で乾杯が済んだ

不可能を可能にするのは、
いつだって基礎技術なんです。

有限会社 安久工機
代表取締役社長

田中 文夫 さん

文 篠塚義成
text: Yoshinari Shinozuka

写真 林 泉
photo: Izumi Hayashi

テフロンの加工は、株式会社おひび三井エレクトロニクス株式会社様へ委託し、その作業過程の記録画像です。

